

教職課程科目における 「大福帳」を用いた教員と学生の コミュニケーションとその効果

中園長新

はじめに

本稿は、大学における教員と学生のコミュニケーションに着目する。「大福帳」と呼ばれるツールを導入することで、教員と学生のコミュニケーションにどのような効果があったのか、そしてその効果は教職課程科目という特定の環境下において、どのような特徴がみられたのかを明らかにすることを目的とする。

学校教育における授業は、多くの場合、教授者（教員）と学習者（児童・生徒・学生）の関係で成立している。これは大学教育においても例外ではない。数十人（学校によっては数百人）という規模の学生を相手によい授業を展開するためには、教員と学生とのコミュニケーションを密にする必要がある。見館ら（2008）は大学生対象のアンケートにより、「教員とのコミュニケーション」が学生の「学習意欲」に影響を与え、「大学生活の満足度」に寄与することを明らかにしている。

しかし、学生の人数が増えれば増えるほど、コミュニケーションは困難なものになる。そのため、様々な研究や実践によって、コミュニケーションの充実を図る方策が検討・試行されてきた。近年ではICT（Information and

Communication Technology: 情報コミュニケーション技術) を活用した事例も増えている。田島 (2016) は、大学におけるクラス教育に LINE を活用し、その可能性を明らかにした。レスポンス・アナライザ¹⁾ を用いた実践も各地で試みられており、学習者の理解度を収集して教材改善につなげている報告 (奥井ら 2009) や、学習者の動機づけ向上の成果を明らかにした研究 (稲葉ら 2012) 等がある。類似のシステムを授業で活用した事例として、繊細な扱いが求められるネットいじめに関する教育において匿名性を保ちながら学習者の意見を収集し、授業内コミュニケーションの活性化を図った実践も存在する (松本ら 2015、中園ら 2015)。

こうした ICT を活用した実践は、機器の多様な機能を活用することで、コミュニケーションを効果的に活発化できると期待される。一方で、ICT (機器) を準備し、適切に活用するためには十分な資金や知識、技術等が必須であり、すべての教員が即座に採用できるとは言いがたい。その点、紙媒体によるアナログベースのコミュニケーションは、多くの教員にとって採用しやすく、学生への負担も少ないことが期待される。紙媒体のコミュニケーションツールは様々なものが開発されているが、本研究では「大福帳」と呼ばれるものを採用し、その効果を検証する。

ところで、本研究が対象とする大学教育 (高等教育) は、分野ごとに高度な専門教育を行うところに特徴がある。近年では、全国の大学等で多彩な学部・学科・課程が設立され、それぞれの学問領域に適した教育が模索されている。すなわち、同じコミュニケーションツールを用いても、学部等の違いによってその効果が異なることが考えられる。特定の学部や学問分野に限定して効果を検証することは、高等教育を対象とした研究ならではの着眼点である。

本研究では、大学の中でも特に、教職課程科目の指導に特化した大福帳の効果を検証する。教職課程科目を受講する学生は、大学卒業後に初等・中等教育の教員となることを志望しており、教育や学習に対する意識が高い。また、大学教員の指導スタイル等を観察し、自らの教育実践に活用していこう

とする姿勢も見られる。そのような特色ある学生にとって、大福帳はどのような効果があるのか。この検討は大学教育の活性化に寄与するだけでなく、養成される初等・中等教育教員の質向上にも貢献できるのではないか。本研究はそうした発展の可能性を含み持つものである。

1. 大福帳とその活用

(1) 大福帳とは何か

本研究の実践で用いた「大福帳」とは、大学教育における教員と学生のコミュニケーションを充実させるためのツールであり、織田（1991）によって考案されたものである。織田が「教師と学生に対して大きな福（利益）をもたらすもの」「学生にとって“閻魔帳”にならないように」²⁾との想いを込めて命名した大福帳は、学生が授業各回の感想等を記入し、教員がそれに対するコメントを返答するという、いわば交換日記のようなスタイルを特徴とする。また、コメント記入の有無によって出欠状況が把握できるため、出席票としての機能も有している。

教員と学生とのコミュニケーションツールは様々なものが開発されているが、その中において、大福帳は下記のような利点があると考えられる。

- ・学生が自由なコメントを記入することにより、学修に対する意欲が高まる。
- ・限られた講義時間であっても、些細なものを含む多数の質問・意見を学生から収集できる。
- ・教員のコメントにより、学生と教員のコミュニケーションが緊密なものとなる。
- ・直筆で感想等を書く必要があることから、出席カードとしては代筆等の不正を防止することができると思われる。

(2) 本実践における大福帳の形式

本研究の実践では、織田（1991）の大福帳を、筆者の授業スタイルに合わせて若干の変更を行った上で活用した。まず、用紙は特厚口（坪量 128g/m²、厚さ 0.14mm）の A4 判カラー厚紙とした。これは一般的なコピー用紙のおよそ 2 倍の厚みである。また、枠等の印刷にはレーザープリンタを用いた。後述するように、大福帳は教員と学生の間を往復することで機能するため、傷みやすいことが懸念されるが、厚紙とレーザープリンタ印刷の併用により、一般的な授業レジュメ等よりも耐久性を高めている。なお、用紙の色は科目によって複数（桃色・若草色・クリーム色等）を使い分けたが、教員が大福帳を整理しやすくするための区別であり、色自体に意味はない。

大福帳表面の上部には、科目・担当教員・曜時限（ここまで印刷済）・学生番号・所属（学部等）・氏名・ふりがなを記入する欄がある。また、向後（2006）の大福帳を参考に、氏名欄の横には 24mm 四方のフリースペースを設けて、イラストなどを自由に記述できる欄とした。フリースペースは学生が「自分だけの大福帳」との愛着を持つことを意図したものだが、返却時に

大 福 帳		No. _____	
2016 年度 前期		コミュニケーションカード	
科目	担当教員	曜時限	学期
学生番号	所属	氏名	ふりがな
30のふりがな		専修・コース	
氏名			
月/日	言いたいこと、聞きたいこと、あなたからの伝言帳。	あなたへの伝言帳	
1 4/12			
2 4/19			
3 4/26			
4 5/3			
5 5/10			
6 5/17			
7 5/24			
8 5/31			

大 福 帳		No. _____	
月/日	言いたいこと、聞きたいこと、あなたからの伝言帳。	あなたへの伝言帳	
8 6/7			
9 6/14			
10 6/21			
11 6/28			
12 7/5			
13 7/12			
14 7/19			
15 7/26			

図1 大福帳（左：オモテ面、右：ウラ面）

自分の大福帳を発見しやすいという効果も期待できる。

大福帳は両面印刷で構成され、オモテ面に氏名等の欄と第1回～第7回授業の記入欄、ウラ面に第8回～第15回授業の記入欄を設けた。なお、第15回は授業の最終回であって大福帳の回収を行わない（履修の記念として持ち帰らせ、教員はコピーを保管する）ため、実質的な大福帳でのやりとりは第1回～第14回の14往復に限られる。各回の記入欄は、学生が記入する「言いたいこと。聞きたいこと。あなたからの伝言板。」という欄と、学生の記述内容に対して教員が返答する「あなたへの伝言板」という欄で構成されている。これらの欄の名称は向後（2006）の大福帳を参考にした。筆者が作成し、実際に授業で活用した大福帳のフォーマットを図1に示す。

(3) 大福帳を活用した授業

筆者の所属大学は千葉県にある私立大学で、経営系の3つの学部と教員養成系学部の合計4学部で構成される（2016年度現在）。教職課程は教員養成系学部を設置されており、教員養成系学部学生の全員が教員免許取得を目指すほか、経営系学部からの履修者も若干名存在する。

筆者は大福帳を用いた出欠・コミュニケーション管理システムを、所属大学において2014年度後期の担当授業（一部）から導入している。本稿では、2016年度前期に開講した2つの教職課程科目での実践を取り上げる³⁾。

1つめの教職課程科目（以下、科目Aとする）は、教育の理念や歴史を学ぶ1年次必修科目であり、教育職員免許法施行規則における「教職に関する科目」の「教育の基礎理論に関する科目」のうち「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」に対応する。学生の所属ごとにクラスが分かれており、2016年度前期は2クラスを担当した。受講人数はそれぞれ30人（以下、A1クラスとする）、72人（以下、A2クラスとする）であった。両クラスとも、全学生が教員養成系学部にも所属する1年生であった。

2つめの教職課程科目（以下、科目Bとする）は、教育の方法と技術を学ぶ3年次必修科目であり、教育職員免許法施行規則における「教職に関する

科目」の「教育課程及び指導法に関する科目」のうち「教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）」に対応する。この科目も学生の所属ごとにクラスが分かれており、2016年度前期は2クラスを担当した。受講人数はそれぞれ44人（以下、B1クラスとする）、46人（以下、B2クラスとする）であった。B1クラスは全学生が教員養成系学部 소속する3年生であった。B2クラスは経営系学部 소속する学生（4年生）が2名おり、その他の44名は教員養成系学部の所属（うち1名は4年生、他は3年生）であった。

科目Aと科目Bは異なる科目であるが、大福帳の活用については同一である。以降、特にことわりがない場合の記述は、科目A・Bに共通のものとする。

(4) 本実践における大福帳の内容

大福帳は授業の一環として活用するものであるから、その記述内容も授業に関連したものが多くなることは容易に想像できる。しかし筆者の授業では、あえて何を書いてもよいということにした。第1回授業で学生に配付した資料には、大福帳の書き方として下記のように明記した（記入内容に関する指示のみ示す）。

- ・ 基本的にはその回の講義の感想・質問・意見を想定しているが、過去の講義に関する感想・質問・意見、個人的な話題、教員に対するツッコミ等も可
- ・ ただし、人間同士のコミュニケーションなので常識の範疇で書くこと（否定的意見や批判を制限するものではない）
- ・ 分量は数行（3～5行程度）を想定しているが、基準は設けない。ただし、何かひとことだけでも書くこと（単語や箇条書きでも可）
- ・ 回収・返却のプロセス上、他の学生が内容を目にする可能性がある
- ・ 代筆は認めないので自分で記入すること（代筆が発覚した場合は代筆した者・させた者の双方を欠席扱いとする）



図2 使用した受領スタンプの例

この指示の結果、学生による大福帳の記述内容は多岐にわたった。実際の記述内容については2節で紹介・検討する。

大福帳は各授業回の終了直前で5～10分間程度の時間を確保し、学生に記入させた。授業冒頭で配付（返却）しているため、授業の途中で質問や感想等をメモする学生もいたようである。大福帳を記入・提出すると授業終了となる。

学生から大福帳を提出された後、教員はまず「あなたへの伝言板」欄の端に受領スタンプを押す。スタンプはコミュニケーションの円滑化を企図し、株式会社こどものかお⁴⁾が販売している「ミニスタンプ浸透印」を採用した(図2)。動物などのかわいらしいイラストを使ったスタンプであり、多様な種類が販売されているが、その中から「OK」「みました」等のコメントが付記されているものを20種ほど購入し、回ごと(週替わり)に異なるスタンプを押すこととした。およそ大学生向けではないデザインのスタンプを週替わりで使用した意図として、そのようなスタンプが返却物に押されたときの

受取手の気持ちを、学生に考えてもらうということがある。教職課程科目の授業であるから、受講生は教員を目指している。大学卒業後に教壇に立ち、担任する児童・生徒に対して同様の行為をすることは十分に考えられる。その際に、他科目の教員が使っているような「まじめな」確認印（たとえば、教員名と日付が入った「検」印）と、筆者が使う「かわいい」確認印とで、受取手（児童・生徒）がどのような気持ちになるか、考えさせることを目指した。なお、教員側がこのような意図を持ってスタンプを活用していることについては、学生にも授業中に説明している。

スタンプ押印後は、「あなたへの伝言板」欄に教員からの返答を記述した。記述量は欄の大きさを考慮し、おおむね4行程度となるように心がけたが、返答内容によって若干の差が生じた（3～5行程度）。原則として学生の記述内容に対する反応であり、返答する際は学生の記述内容をなるべく肯定的に受け止めるよう配慮した。また、趣味の話題等で筆者が知らない情報が記述された場合は、その話題について情報をできる限り調査した上で回答することを心がけた。

学生から寄せられた記述内容の中には、個人的な感想や質問も多くあり、それらは当該学生本人に回答すればよい。しかし中には、授業時に説明不足であった点に対する質問、より深い考察や異なる視点を提供する意見等の、クラス全体の学修に寄与するものもみられた。そうした質問・意見等とその回答は学修に資するため、クラス全体で共有することが望ましい。そこで、共有すべき質問・意見と回答を「フィードバックシート」と呼ぶプリントに整理し、次時に配付した。フィードバックシートで取り上げる際は記述者名を明記せず、記述内容の本質が失われない程度に適宜表現を変えて記載した。このことについては第1回授業時に学生に説明済である。フィードバックシートに取り上げる項目数は授業回・クラスごとにまちまちであり、共有すべきものがない場合は作成しなかった。

なお、教員からの返答については、第1回授業時に「教員の事情によりコメントを返せない可能性がある」ことを学生に伝えている。大福帳への返答

には多大な時間と労力を要するため、教員の業務状況や健康状態によっては返答が間に合わない可能性があることを想定して、あらかじめ「保険」として了承してもらったものである。しかし2016年度前期に関しては、返答までに2週間を要することがあったものの、結果的にすべての学生コメントに返答することができた。教員の時間と労力に関する議論は4節で扱う。

2. 大福帳の記述内容

本節では、学生が大福帳に記述したコメントの内容を概観する。前述の通り、大福帳への記述内容は自由としているため、コメントの内容は多様なものとなった。コメント内容を類似したもの同士で整理すると、下記のように分類できる。なお、併記した例示（文章）は実際の記述内容を一部省略して記載している。図3～7は、記述者の許可を得て実例を匿名で掲載した。各図において、左枠は学生の記述、右枠は教員のコメントである。

- ・ 授業の感想・質問・意見（図3）
 （「いつもと違うメンバーでの話し合いは楽しかった」「ICTをすごいと感じた」等）
- ・ 大学の学修・生活に関すること
 （「介護等体験がんばります」「テストが多くて大変です」等）
- ・ 授業以外（教採試験、別科目等）の質問
 （「学校現場支援で困ったことがある」「教採情報を入手できる本を知りたい」等）
- ・ 学生個人の近況・趣味や世の中の動向（図4）
 （「最近映画をよく観に行きます」「梅雨に入ってしまった」等）
- ・ 悩み相談（図5）
 （「最近食欲がなくて困っています」「ストレス発散法を知りたい」等）
- ・ 教員に対する質問・声かけ・コメント（図6）

(「好きな歌手は誰ですか」「体調おだいじにしてください」等)

・単語、つぶやき、短いコメント (図7)

(「出席」「特に書くことがない…」等)


<p>ICT教育はこれから益々増えていくので、自分を活用できるよりにしたい。これだけではない、今の私の良いところは是非として授業にできるよりにしたい。</p>	<p>新しい技術の活用も大切ですが、これまでに活用してきたものも引き続き使っていきます。</p> 
---	---

図3 授業感想の記述例 (B2クラス学生)


<p>夏の暑さは、アタマで乗り切ります。 ・カミパンの聖地「大洗町」に夏休みの旅行しようかと考えています。</p>	<p>大洗や、その近くの那珂湊などは、おいしい海鮮を楽しめます。大洗はいいぞ。</p> 
---	--

図4 学生個人の趣味の記述例 (A1クラス学生) ⁵⁾


<p>最近熱もないのに体がたるかったり、朝早く目がさめるのに起きることができぬたり、1日中眠かったり、食欲がなくなったり、気分の落ち込みが激しかったりと色々体の不調があるのですが、心配したり余念なくて困っています。将来教員になった時にこれではダメなと思ふにどうすることもできず、最近おせりも感じています。今の状況とどうにかしたいのですが、何かアドバイスはありますか？</p>	<p>似た幼少相談が何件かあるから、ワードにコメントにコメントしました。</p> 
---	--

図5 悩み相談の記述例 (B1クラス学生)


<p>今日は、4限。明日、明後日は夜間の講義があって楽しいです。食堂や廊下で、先生に会うと笑顔で挨拶してくれるのが嬉しいです。私もそうなりたいです。しかし、先生のように11つも笑顔でいる自信はないです。</p>	<p>もちろん私も疲れたりすることはありますが、みみせとの交流で元気をもらっています。</p> 
---	--

図6 教員に対するコメントの記述例 (B2クラス学生)


<p>少い方が求。</p>	<p>だんだん夏が近づいてきましたね。クラブ使えるようにしたら使っていきます。</p> 
---------------	--

図7 短いコメントの記述例 (A2クラス学生)

3. 大福帳に関する質問紙調査

(1) 質問紙調査の概要

大福帳の教育効果を測定するため、各科目の最終授業において質問紙調査を実施した。調査実施期間は2016年7月26日から2016年8月1日である。質問紙調査は無記名で、調査結果は授業の成績に反映させないことを告知した上で実施した。各科目・クラスならびに全体の回答率等は表1の通りである。質問紙調査の内容は向後(2006)を参考に、本研究独自の内容とした。

次項からは質問紙調査の結果を、授業の印象・感想、教員のコメント頻度に対する意見、大福帳の返信内容に関する意見のそれぞれの視点から整理する。

表1 質問紙調査の回答率等

科目	クラス	受講者数	回答者数	回答率
科目 A	A1 クラス	30	25	83.3%
	A2 クラス	72	70	97.2%
	小計	102	95	93.1%
科目 B	B1 クラス	44	37	84.1%
	B2 クラス	46	43	93.5%
	小計	90	80	88.9%
計		192	175	91.1%

(2) 質問紙調査の結果1：授業の印象・感想

大福帳を活用した授業を受講しての印象・感想を、項目ごとに1(否定的)～4(肯定的)の4段階で回答してもらった。本稿では便宜上、この数値をポイントと呼ぶことにする。調査結果(質問項目、ポイントの平均、標準偏差)を表2に示す。ポイントの平均値は、3.0未満のものについては下線付き斜体、3.5以上のものについては下線付きゴシック太字で示した。

いずれの項目もポイントが高い傾向にあるが、その中でも特にポイントの

表2 質問紙調査の結果

質問項目		平均	標準偏差
大福帳に自分のコメントを 記入することは	楽しかった	3.29	0.73
	簡単だった	3.23	0.84
	わくわくした	<u>2.90</u>	0.74
	有意義な時間だった	3.14	0.65
	励みになった	3.21	0.67
大福帳に教員からのコメントが 返ってくることは	期待していた	<u>3.51</u>	0.68
	嬉しかった	<u>3.58</u>	0.57
	ありがたく感じた	<u>3.56</u>	0.64
	楽しかった	<u>3.51</u>	0.64
	励みになった	3.43	0.69
大福帳と授業の関係	授業に参加しているという実感	3.18	0.78
	授業に出席しようという意欲	<u>2.93</u>	0.74
	教員とのコミュニケーション	3.14	0.84
	授業の内容について深く考えること	<u>2.83</u>	0.80
	授業内容の記憶への定着	<u>2.55</u>	0.78
	自分の考えを文章にする練習	<u>2.96</u>	0.83
	自分の意見を主張する練習	<u>2.91</u>	0.86
かわいいキャラクターの スタンプ利用	愉快だった	<u>3.59</u>	0.54
	楽しかった	<u>3.50</u>	0.61
	励みになった	3.23	0.73
スタンプが毎回異なること	愉快だった	<u>3.63</u>	0.51
	楽しかった	<u>3.58</u>	0.57
	励みになった	3.30	0.70
フィードバックシートで 回答がなされることは	楽しかった	3.34	0.63
	有意義な時間だった	3.32	0.65
	励みになった	3.29	0.69
	嬉しかった	3.38	0.60
	不平等感はなかった	3.46	0.71
フィードバックシートの 回答内容は	適切な量だった	3.49	0.68
	興味深かった	3.32	0.81
	適切な難易度だった	3.44	0.58
	学修に役立った	3.36	0.73
教員に対する意識	親近感がある	<u>3.54</u>	0.61
	頼りがいがある	3.43	0.64
	知識量に感服	3.46	0.66
	優しい・楽しい	<u>3.56</u>	0.59
	ありがたい	<u>3.51</u>	0.69

平均が高かった項目としては、大福帳に教員からのコメントが返ってくることに對するものや、スタンプの活用に関するもの、教員に対する意識変容等がある。一方で、ポイントの平均が低かった項目としては、大福帳と授業の関係に関するもの等がある。

(3) 質問紙調査の結果2：教員のコメント頻度に関する意見

質問紙調査ではその他の設問として、大福帳への教員コメント頻度についての希望を回答してもらった。その結果、「毎回ほしい」が133件(76.0%)、「2回に1回はほしい」が22件(12.6%)、「3回に1回はほしい」が6件(3.4%)、「もっと少なくてもよい」が5件(2.9%)、「なくてもよい」が6件(3.4%)であった(無回答3件)。

(4) 質問紙調査の結果3：大福帳の返信内容に関する意見

大福帳の教員コメントについて、返信されて嬉しかった内容やよかった内容、あるいは嬉しくなかった内容やよくなかった内容を自由記述で収集した。調査結果(自由記述の内容)を整理し、類似したものをグループ化した結果、表3のような傾向が見られた。科目・クラスによる傾向の差異は見受けられなかったため、すべての回答をまとめて整理している。各項目末尾の括弧つき数字は、その項目に該当する回答数であり、表内は項目ごとに回答数順に整理した。自由記述であるため「内容」以外への言及も見られるが、それらについても排除せず列挙している。本項目は記入がない回答者や複数内容を回答した回答者もいたため、回答数の合計は有効回答数とは合致しない。

4. 考察

質問紙調査の結果、大福帳の効果がいくつか示唆された。本稿では特に示唆に富む点について、授業の印象・感想、コミュニケーションツールとしての大福帳の活用、教員の労力、教職課程科目における特徴の四点について考

表3 大福帳の返信内容に関する意見

嬉しかった内容やよかった内容	嬉しくなかった内容やよくなかった内容
<ul style="list-style-type: none"> ・学修や悩みに対するアドバイス(24) ・どんな質問でも回答してくれる(21) ・回答・コメントが毎回もらえる(14) ・励ましや気遣い(8) ・返信内容が肯定的・共感的(7) ・教員とのコミュニケーション(6) ・授業内容の補足説明(5) ・コメントの「ネタ」が通じた(3) ・スタンプがユニーク(3) ・コメントを読んでくれたと分かるもの(2) ・綺麗事ではなく現実を見据えた回答(1) ・自分の質問をフィードバックシートに取り上げてもらったこと(1) ・話題の豊富さ(1) ・新しいことを知ることができた(1) ・コメント内容の誤字指摘(1) ・「次の講義で扱います」のような予告(1) ・大福帳の活用そのもの(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・会話を打ち切るような内容(1) ・質問に対する消極的⁶⁾回答(1) ・教員と学生とのコメントの温度差(教員のテンションが高すぎる)(1) ・無難な回答ばかりで物足りない(1) ・教員の負担になっていないか心配(1)

察を行う。

(1) 授業の印象・感想に関する考察

授業の印象・感想に関する質問紙調査結果(表2)を分析することにより、下記の三つの示唆が見出せた。

第一の示唆は、本実践における大福帳の活用は、授業への取り組みや受講生の学修に大きく寄与するものではないというネガティブなものである。このことに関する質問項目は、相対的にポイントが低い傾向にあった。たとえば、「授業内容の記憶への定着」についてはポイントの平均が2.55となっており、大福帳によって授業理解が向上することはあまり期待できないことが

分かる。また、「自分の考えを文章にする練習」（ポイント平均 2.96）、「自分の意見を主張する練習」（同 2.91）という観点からも、大福帳の効果は大きくないことが示された。授業への参加態度という観点からも、「授業に出席しようという意欲」の平均が 2.93 にとどまり、大福帳による大きな変化は期待できないことが考えられる。

第二の示唆は、教員に対する意識変容である。この点については第一の点とは対照的に、ポジティブな結果が得られた。教員に対する意識として、特に「親近感がある」（ポイント平均 3.54）、「優しい・楽しい」（同 3.56）、「ありがたい」（同 3.51）といった項目に対して肯定的評価が得られた。大福帳のやりとりを通して、学生が教員に対して親近感を持ち、よい意味で距離感を縮めることができたことが伺える。この点については筆者の主観ではあるものの、授業回を重ねるごとに学生が教員（筆者）と積極的にコミュニケーションするようになり、大福帳の記述内容を通じた雑談も増えたという実感もある。

第三の示唆は、授業の楽しみとしての意義である。「大福帳に教員からのコメントが返ってくることは」の項目について、多くの受講生が「期待していた」（ポイント平均 3.51）、「嬉しかった」（同 3.58）、「ありがたく感じた」（同 3.56）、「楽しかった」（同 3.51）と感じていることが分かる。また、「かわいいキャラクターのスタンプ利用」や「スタンプが毎回異なること」に対して「愉快だった」「楽しかった」（いずれのポイントも 3.5 以上）と感じている学生が多く、この示唆に関してはスタンプの活用において得られる効果も大きかったことが読み取れる。高度な内容を学修する授業は、受講生にとって多かれ少なかれ大変なものである。そうした状況下において、大福帳にイラスト入りの多様なスタンプが押され、コメントが返ってくることにより、授業が愉快で楽しいものになったのではないかと考えられる。イラスト入りの多様なスタンプを押す意義については学生に説明済であったが、その意図が学生の実体験として確認できたことが伺える。

(2) コミュニケーションツールに特化した大福帳の活用

前項で示した考察において、大福帳の活用が授業への取り組みや受講生の学修に大きく寄与するものではなかったという示唆について考えてみたい。先行研究（向後 2006）では、大福帳の効果として「授業内容の知識の定着」は特に低い評価となっているわけではない。各調査は質問項目等が不一致であるために単純な比較はできないものの、本調査と先行研究の結果に違いがある点は興味深い。

この点については、大福帳に何を書くかによって結果が異なっていることが予想される。向後（2006）の実践では、大福帳の記載内容は「感想、意見、質問などを自由に記入」とされており、授業に関する内容を書くことが求められていたことが読み取れる。一方で本実践では、授業に関係ないことであっても記入することができた。これは当初から大福帳の記述内容を成績に反映させず、コミュニケーションツールに特化させるという筆者の意図があったためである。大福帳の活用を受講者の学修に寄与させるためには、向後（2006）の実践のように、大福帳の記述内容を授業に関することに限定する、あるいは推奨するとよいのではないかと考えられる。

逆に言えば、本実践では大福帳をコミュニケーションツールに特化させるという筆者の目的が達成されたものと解釈することもできる。表3で示したように、大福帳の返信内容に関する肯定的な意見として、教員から学生に対するアドバイスが嬉しかった・よかったとする意見が多く収集された。また、どんな些細な質問（趣味の話等も含む）にも回答してくれることや、励まし、気遣い、肯定的・共感的 content についてもポジティブな意見が多く寄せられた。これらの結果からも、学生は大福帳を「学修の手段」というよりもむしろ「教員とのコミュニケーションの手段」として活用していたことが伺える。もちろん、学修に貢献したことを評価する意見も少なくなかったが、教員とのコミュニケーションを重視した回答が多数を占めていた。

大福帳の活用による学修面での影響が大きいことから、受講生・教員ともに、大福帳に対して成績の心配をすることなく向き合うことができる。

大福帳が「閻魔帳」にならないためにも、こうした向き合い方は重要であるといえるだろう。また、講義という限られた関係の中で、学修・生活・進路等に関する様々な情報交換ができるという点で、本実践のような大福帳の活用にも意義があるものと考えている。実際に、大福帳でのやりとりがきっかけとなって、教員のもとに悩み相談に訪れたり、学修指導を受けに来たりした学生が複数人おり、生活・学修の両面において「面倒見のよい」きめ細かな学生指導の実現に大きく貢献している。

(3) 大福帳活用に要する教員の時間・労力

次に、大福帳の返答を行う教員の時間・労力について検討する。この観点については現時点で定量的なデータを収集しておらず、その多くを今後の課題とするところであるが、実際に携わった筆者自身の経験として、今後の発展に向けた問題提起としたい。

大福帳への教員コメント記入は、教員に多大な労力を強いるものである。正確に計測したわけではないが、本稿の実践の場合は、学生1名の記述に対して2分程度の時間をかけてコメントを記入した。科目Aと科目Bの受講者は合計で192名であったから、200名として概算すると、各週400分（6時間40分）をコメント記入に費やす必要がある。しかも、回答に際して調査が必要な場合や、回答をフィードバックシートに整理する場合は、さらに時間をかけることになり、8時間から10時間程度かけることもあった。

これまで考察してきたように、大福帳に教員コメントを返答することは、教員と学生のコミュニケーションという観点で非常に意義のあることである。この苦勞をかけることによって教員と学生との距離が縮まり、「面倒見のよい」きめ細かな指導を実現できている。一方で、授業準備・実施だけでなく様々な業務を抱える大学教員にとって、毎週6時間以上を大福帳に費やすことは現実的に不可能となることも危惧される。コミュニケーションの充実と時間・労力の節約はトレードオフの関係にあり、そのバランスをどこに求めるかについては、今後の検討の余地があるといえよう。もちろん、学生

と教員それぞれの個性や、大学・学部や科目の特性等、検討を要する因子が多数存在することから、普遍的に通用する最適解があるとは考えにくい。多くの大学教員が大福帳を効果的に活用するためには、それぞれのパターンに応じた様々な活用案を提示する必要があると考える。この点については今後の検討課題としたい。

なお、教員の時間・労力を節約する方法のひとつとして、大福帳へのコメントをすべてに対して行うのではなく、頻度を下げて数回に一回の割合でコメントするという方法が考えられる。しかし本調査の結果では、実に7割以上の学生が教員コメントを「毎回ほしい」と回答しており、コメント頻度を下げるとは大福帳のコミュニケーションツールとしての効果を低下させてしまうことが考えられる。

(4) 教職課程科目における特徴

本実践は2つの教職課程科目で行った。教員を志望する学生にとって、大福帳の活用は自身の学修だけでなく、目指す教師像への影響もあったのではないかと考えられる。

大福帳の返信内容に関する意見の中には、「教員になったら自分も大福帳を活用してみたい」という趣旨の回答が見受けられた。また、大福帳において、教員が使っている受領スタンプのメーカーや購入方法を質問するコメントをはじめ、スタンプの活用に対する肯定的意見が多く収集された。学生が志望する進路は初等・中等教育（小学校、中学校、高等学校等）の教員であり、今回活用した高等教育（大学）とは異なる。初等・中等教育における授業と高等教育における授業は似通っている点も多いが、同じ手法やツールをそのまま転用できるとは限らない。しかし、学生の中にはそうした問題点を理解しながらも、初等・中等教育における大福帳や受領スタンプの活用を考察する者がいた。本稿執筆時点で彼らはまだ学生であるから、実際に大福帳や受領スタンプを活用してみたという事例はまだ存在しない。しかし、学生が数年後に教員として初等・中等教育の教壇に立ち、大福帳あるいはそれに

影響を受けたコミュニケーションツールを活用することがあれば、本実践は科目としての目標以上のものを学生に残せたことになる。

なお、教職課程科目のみで見出される特徴を抽出するためには、教職課程科目とそれ以外の科目における大福帳の効果を比較する必要があると考えられる。この点については今後の検討課題である。

おわりに

本研究では、教職課程科目2科目4クラス（受講学生合計192名）において、「大福帳」を用いた教員と学生のコミュニケーションを実践し、その効果を大福帳の記述ならびに質問紙調査を通して分析した。筆者が行った「授業に関係ないことであっても記入することができる」スタイルの大福帳の活用では、学生は大福帳を学修の手段としてよりもむしろ、教員とのコミュニケーションの手段として認識・活用していたことが明らかになった。大福帳に関しては肯定的な印象・感想が多く、学生にとって大福帳の活用は効果的であったことが明らかになった。

今後は、学修の手段としてのツールと、教員とのコミュニケーションの手段としてのツールの両方を検討していく必要がある。後者が大福帳によって実現されることは本研究によって明らかになったが、前者を担うツールについては、大福帳の役割を拡張するのか、あるいは振り返りシート等の別ツールを併用するのか、様々な可能性が考えられる。また、コメントへの回答をはじめとする教員の労力についても、学生からの期待に反しない範囲でいかに削減するかを考えていく必要があるだろう。

教職課程科目の学生からは、大福帳を活用していく中で、自分が教員になったらぜひ活用してみたいという趣旨の感想が複数得られた。学生が就職する現場は初等・中等教育であるから、大福帳を導入したとしても、高等教育機関である大学での活用とは異なるものになると予想される。しかし、教員を志望する学生が大福帳というコミュニケーション手段を知り、活用したと

いう経験は、彼らの教員としての資質に何か貢献できるのではないだろうか。我が国の教育の質向上に、本実践で行ったような大福帳の活用が寄与できれば幸いである。

また、本研究では大福帳のやりとりを中心に活用したが、本実践のもう一つのツールとしてフィードバックシートの存在がある。こちらの効果に関しては質問紙調査で十分に確認することができなかったが、今後は質問項目の改良等を実施し、フィードバックシートの効果についても検討を深めることを計画している。

<謝辞>

大福帳の活用とその効果測定のための調査にご協力いただいた、各授業受講者各位に深く感謝いたします。

<注記>

- 1) 学習者一人ひとりにリモコン状の機器等を配付し、教師の発問に沿ってボタン操作を行わせることによって、多人数の学習者の意見を瞬時に収集・集計するシステム。クリッカーと呼ばれることもある。従来は専用機器を学習者の人数分購入する必要があったが、近年ではスマートフォンアプリとして実装した商品も開発・販売されている。アプリは専用機器に比べて一般に安価であるため、教育機関で導入しやすい。今後の普及が期待される ICT のひとつである。
- 2) 「閻魔帳」とは、学校において教員が活用している、児童・生徒の成績や日頃の行いを記録する手帳の俗称である。成績等が記録されているため、児童・生徒にとって「恐ろしいもの」という認識からきた俗語であろう。一般には教務記録簿と呼ばれることが多い。
- 3) 2014年度後期は、非常勤講師としての活用であった。2015年度以降は、専任教員としての活用である。
- 4) 株式会社こどものかお <http://www.kodomonokao.com/> (2016年9月30日確認)

- 5) 学生コメントにある「ガルパン」とは、茨城県の大洗町を舞台にしたテレビアニメ「ガールズ&パンツァー」の略称である。2012年に放映された後に多くのファンが「聖地巡礼」と称して大洗町に観光で訪れ、町の収入や知名度が急激に上昇したことがニュース等で話題になった。文化による地域活性化の成功事例として学界でも注目されている（例として、石坂ら 2016）。ファンの間ではこの作品の魅力を語る際に「ガルパンはいいぞ」と発言することが慣例化しており、この学生記述に対する教員コメント「大洗はいいぞ」は、そうした文化背景を学生と共有した結果である。
- 6) 無記名調査であるのでどのような対応に対しての意見であるのか、具体的に特定することはできないが、学生からの「先生の得意なスポーツは何ですか？」という質問に対して「スポーツ全般苦手なので、あまりできないのです」と回答したこと等が該当すると推測される。

<引用文献>

- 石坂愛, 卯田卓矢, 益田理広, 甲斐宗一郎, 周宇放, 関拓也, 菅野緑, 根本拓真, 松井圭介 (2016) 「茨城県大洗町における「ガールズ&パンツァー」がもたらす社会的・経済的変化: 曲がり松商店街と大貫商店街を事例に」筑波大学人文地理学・地誌学研究会『地域研究年報』38号, pp. 61-89
- 稲葉利江子, 山肩洋子, 大山牧子, 村上正行 (2012) 「発言の自由度を高めたレスポンスアナライザを活用した大学授業の実践と評価」日本教育工学会『日本教育工学会論文誌』第36巻第3号, pp. 271-279
- 奥井善也, 原田史子, 高田秀志, 島川博光 (2009) 「講義中の反応に基づく説明方法と教材の改善」情報処理学会『情報処理学会論文誌』Vol. 50, No. 1, pp. 361-371
- 織田揮準 (1991) 「大福帳による授業改善の試み: 大福帳効果の分析」三重大学教育学部『三重大学教育学部研究紀要: 教育科学』第42巻, pp. 165-174
- 向後千春 (2006) 「大福帳は授業の何を変えたか」日本教育工学会『日本教育工学

会研究報告集』JSET06-5, pp. 23-30

田島博之 (2016) 「少人数クラスにおける SNS 活用に関する研究：LINE の実験的活用から」秀明大学『秀明大学紀要』第 13 号, pp. 19-36

中園長新, 鈴木佳苗, 安田つくし, 松本宗久 (2015) 「人間関係のトラブルを目撃した場合の行動選択に関する教育実践と評価 (2)：レスポンス・システムを用いた短縮版プログラムの検討」日本教育情報学会『日本教育情報学会 年会論文集 31』 pp. 286-287

松本宗久, 鈴木佳苗, 中園長新, 安田つくし (2015) 「人間関係のトラブルを目撃した場合の行動選択に関する教育実践と評価 (1)：レスポンス・システムを用いたプログラムの検討」日本教育情報学会『日本教育情報学会 年会論文集 31』 pp. 284-285

見館好隆, 永井正洋, 北澤武, 上野淳 (2008) 「大学生の学習意欲, 大学生生活の満足度を規定する要因について」日本教育工学会『日本教育工学会論文誌』第 32 巻第 2 号, pp. 189-196

(なかぞの ながよし・助教)